

# 古代史に遊ぼう



## 第 63 回 - 縄文とケルト - その 1

ユーラシア大陸の東端と西端という正反対の位置にある日本とイギリス。新石器時代、大陸では四大文明の地域のような「文明型」の社会が広まっていくなかで、その果てにあった両地域は、「非文明型」の社会へと発展していった。直接的交流のないこの二つの地域になぜ共通性が生まれたのか？ また、同じホモ・サピエンスなのに、なぜ大陸とは異なる方向へ進んだか？ ストーンサークルや巨大な墓など、それぞれの遺跡を訪問・精査した記録から、いままで見えていなかった知られざる歴史に迫ってみたい。

縄文時代は最終氷期の終了後の温暖化に適応して始まった日本列島の新石器時代に相当する。縄文時代を象徴する複雑かつ華麗な土器がとくに発展したのは、およそ 6000～4500 年前、草創期および早・前・中・後・晩の 6 期に分けられる縄文時代のうちの、前期後半から中期にあたる時期である。関東甲信越から東北にかけての地域がその発展の中心であった。縄文土器は、世界のなかでもっとも有名な新石器時代「芸術」の一つに数えることが出来る。6000～4500 年前に関東甲信越では縄文時代のうちでもっとも大規模な定住が進み、人口が増えてその密度も高まった。つまり、ひとところに多人数が顔つき合わせて永住することによって、濃くなった人間関係が、新石器時代「芸術」の母胎となったのである。

人間関係が濃くなると、個人どうしや家族どうしの競争意識、ともに集まって暮らす多人数のあいだの仲間意識、その裏返しとなる外に向けての排他意識など、さまざまな社会的感情が人びとのあいだを行き交うようになる。そして、そのような感情はおのずと、仕事の出来ばえを競ったり、デザインが共通する道具を仲間のしるしとして持ちたがったり、同じ偶像を崇拜したりすることによって、器物の形や表現にもりこまれていくようになる。いいかえれば、器物にはその本来の機能的・物理的役割だけでなく、社会的・心理的な役割が託されるようになるのである。そのような器物が現れると、それが濃密な人間関係にもとづく複雑な社会の形成を助けるようになる。日本列島新石器時代の縄文土器は、そのもっとも典型的な表れであった。

いっぽう、「ブリテン島」の新石器時代は、温暖化したとはいえ日本列島よりは幾分冷涼な気候だったこともあって資源がうすく、日本の縄文時代のような多人数の定住や高い人口密度には至らなかった。現在のイギリスという国は、公式には「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」である。このうちの「グレートブリテン」は、首都ロンドンがある大きな島で、隣のアイルランド島や周囲の小さな島々とともに、地理的には「ブリテン諸島」を構成する。正式には「グレートブリテン島」と呼ぶべきだが、本稿では省略して「ブリテン島」と便宜的に呼ぶことにしたい。ブリテン島の東南部を中心に最も大きな領域を占めるのがイングランド、北部がスコットランド、島の南西部寄りにこぶしのように太短くつきだした部分がウェールズで中世にはそれぞれが独立した王国を形成していた。

ドングリやクリなどの堅果類が主要食糧だったために煮沸用の土器がたくさん必要だった日本列島に比べ、ムギ類を製粉してパンに焼くことが多かったブリテン島では、土器そのものがずっと少なかった。それでも、縄文土器と同時期の産物である「ピーターパラ式」とよばれる土器などは、ブリテン島の先史時代の産物のうちでは最も複雑に発達した文様をもち、雰囲気は縄文土器とたいへんよく似ている。

「芸術」の表現パターンは時代や社会によって異なるが、同じパターンをもつ社会は、たとえ地理的・年代的に隔たっていたとしても、そのしくみや発展度、そこから来る人びとの心性や思潮といったものがきわめてよく似ている。新石器時代の前半にあたる 6 千年前をすぎたころの日本列島とブリテン島は、ユーラシア大陸をはさんでたがいに正反対の位置にあるけれども、そのような意味で、同じしくみや発展度に根ざして、あい似た心性や思潮を持つ二つの社会だったと考えられる。

だが、それから千数百年ののち、日本列島の新石器時代社会は、地球規模で進んだ寒冷化の危機に直面した。最終氷期を終わらせた温暖化は、5000 年前までにピークに達したあと、しだいに後退して寒冷化が進んだのである。かつての氷期ほどの厳しい寒さに襲われたわけではないが、ピーク時よりも平均して 2、3 度くらいは平均気温がさがったとみられるこの環境変動は、植物資源などの収穫に大きく影響し、それに依存してきた新石器時代の社会を世界の各地でしだいに変質させていった。それには大きく見て二通りの方向がある。

第一は、それまで続いてきた植物の栽培や動物の飼育をより強化・徹底することによって生産量を増やし、定住社会を何とか維持していこうとする方向である。この方向が顕著にあらわれたのは北半球の中緯度地帯で、西アジアのメソポタミアやインダス川流域、アフリカのエジプト、中国の黄河流域など、いわゆる四大文明の中心となった地域はその典型である。これらの地域では、灌漑などの技術と労力を耕地に投入して農業の集約化をはかり、それを統括する人々が富と威信とを高めていくというタイプの社会が出来た。都市や国家の形成である。もっとも、これらの地域のなかには、この時の寒冷化がかえって植物資源に良い影響を与え、それが都市や国家の形成を後押ししたところもあった。

第二は、第一の地域の周辺、とくにそれらよりも高緯度で、寒冷化が植物資源にさらに深刻な打撃を与えた地域が見せた方向である。日本列島の縄文やブリテン島のケルトの社会が進んだのは、主としてこの方向であった。これらの地域では、定住を支える生産量を増強させるのではなく、定住を解いて人口を分散させ、一つの集団を支える資源がなるべく少なくすむようにするという、都市や国家の「文明」に根ざした社会とはまったく異なる歴史の軌道を踏むことになったのである。

温暖化から再びの寒冷化へ。人間社会に対する、まるでアメからムチへというこの働きによって、地球上に広まった新石器時代は二つの異なったタイプに振り分けられた。四大文明の地域を典型とする「文明型」の社会と、その周辺に生じた「非文明型」の社会である。日本列島の縄文時代社会は非文明型へと進んだ。さらに高緯度にあつて、もとより冷涼だったブリテン島でも、紀元前3000年紀の半ば以降、いっそうの寒冷化が目立つようになり、ケルト社会は非文明化の特徴をますます顕著に備えるようになっていった。

それは、集約化させた農業生産をもとに王・都市・国家を生み出すなどの、いわば自然に対峙して膨張していく社会ではなく、自然に溶け込みながら持続していく社会と違ってよいだろう。そういうと、文明型のような物質文化を生み出さない地味で貧しい社会だったかのように聞こえるかも知れないが、けっしてそうではない。文明型の社会の直接の子孫ともいえる現代の先進社会に生きる私たちには、時には極めて奇妙に見える理解のむずかしい、だがそれだけに新鮮で魅力的な沢山の記念物—生産活動ではなく精神活動のために築かれた建造物—を、かれらは残しているのである。ともにこの道を歩んだ日本列島とブリテン島は、このような記念物の宝庫と云える。それらを訪ねることで、営んだ人びとの心に触れつつ、両地域に花開いた非文明型の社会の共通とする本質を探ることが出来るだろう。同時に、両地域がその後に進んだ歴史のちがいにまつながっていったような差異もまた、見つけだせるであろう。

最初に尋ねるおすすめ場所は、ブリテン島南部、英国ウィルトシャーの世界遺産「ストーンヘンジ、エーヴベリーと関連する遺跡群」である。そのうちの、「エーヴベリーと関連する記念建造物群」としてまとめられている方である。あとで訪ねる「ストーンヘンジと関連する記念建造物群」からは、30キロメートルほど北に離れている。両方を一日でみられるバスツアーもロンドンあたりから出ているが、新石器時代の人々の心に触れられるほどにゆっくりと見て回るにはレンタカーを利用して、気ままに個人で旅行することが望ましい。その理由は第一に英国の田舎は日本に比べるとはるかに広く、多くの遺跡は牧草地の丘や農場の中に点在している。そういう場所に容易に近づける公共交通機関はまずない。第二に英国の自動車運転は右ハンドル・左側通行で日本人には非常に簡単である。出発前に「国際免許証」を取っておけば、あとは国内でレンタカーを借りて乗るとほとんど同じであり、レンタカーの予約は日本からでもネット上で可能である。

現地のレンタカー屋では最低限の片言英語で十分にこと足る。鍵を受け取って運転席に陣取ればこっちのもの。あとは英国の道路の最大の特徴といえる「ラウンドアバウト（ロータリー）」方式の交差点に慣れるのと、方向指示器とワイパーの位置がなぜか日本と逆だということに気を付けるくらいのものである。（雨も降っていないのに交差点でワイパーを動かしている車は、たぶん日本人が乗ったレンタカーだろう）。

さて、エーヴベリー（実際の発音は「エイブリ」のように聞こえる）に行くとなれば、近くのいちばん大きな町スインドンで、レンタカーを手配しておけばよい。ロンドンからスインドンまでは、バディントン駅発の列車で1時間弱である。エーヴベリーとその周辺の最大の楽しさは、新石器時代のブリテン島に栄えた「非文明型」の社会の人々が石や土で築いたいろいろな記念物が一堂に集まっていることである。

（岡野 実）

文献：縄文とケルト—辺境の比較考古学 松木武彦（著） ちくま新書 （2017）